

## 健康増進セミナー in 大阪

# いくつになっても元気で活動しよう

2017年2月18日(土)、大阪市・大阪市中央公会堂 大集会室にて、健康増進セミナー in 大阪『いくつになっても元気で活動しよう』を開催しました。

当日は、肺がんの最新治療や再生医療の可能性など、最新の医療情報を得るまたとない機会となりました。



### 「肺がん治療の最前線」

大阪大学大学院医学系研究科  
呼吸器外科学教室 教授

奥村 明之進 先生

#### 1部

今や肺がんは、手術ができれば約70%助かる病気



日本胸腔外科学会の発表では、1986年には全国では肺がん手術は6千例ほどでしたが、2016年では4万件を超え、約30年間で約6倍に増えていきます。治療成績も、外科的治療を受けた方の1986年の5年生存率が47.8%、2004年の約70%です。たとえ肺がんになったとしても、手術ができる状態なら、約70%助かります。早期発見が大切です。

肺がんの病理分類は、小細胞肺がんとは非小細胞肺がんに分かれます。治療方針は、がんの進展具合、腫瘍の大きさ・浸潤の度合い・遠隔転移などを判断し、手術・化学療法・放射線治療等が決まります。重要なのは、外科治療や放射線治療は局所療法で、遠隔臓器に転移となると全身疾患ですから、薬の治療となります。

肺がんの標準的な治療は、肺葉とリンパ節の切除です。腫瘍が大きく肺門部にある場合は肺の全摘術、早期なら肺を温存して根治できます。手術には、「胸腔鏡」という内視鏡を使います。3次元で構築したCT画像で画像シミュレーションをした後に、胸に小さな穴を開け、カ

メラで胸の中を見ながら手術します。以前と比べると、傷も痛みも格段に少ないです。進行がんの場合は、開胸する拡大手術となります。

#### 新しい治療法の開発で、増えた治療の選択肢

腫瘍が切除できない場合は、放射線治療となります。二次元照射で、腫瘍が消える場合もあります。さらに放射線治療ができない場合は、抗がん剤治療となります。近年、肺がんの原因遺伝子が発見され、それによってさまざまな薬剤療法が開発されるようになってきました。特にイレッサなど「分子標的治療薬」が非常に進歩しており、現在はこのような新しい治療薬を導入することが、がん治療の新しいトレンドとなっています。

なかでも特に注目されているのが、「免疫療法剤」です。がん細胞は本来異物として免疫系に排除されるはずなのに、正常細胞が免疫系をかいくぐるシステムをがん細胞自身が発現し、免疫細胞からの攻撃を逃れるという性質があります。この免疫細胞からの攻撃を逃れがん細胞のPD-1/L-1径路をブロックする、がん免疫療法剤があるのですが、実際は効果があるのは20%ほどです。しかしながら、新しい薬・放射線治療法、難しい外科的治療も開発されるようになり、治療の選択肢が増えていきます。先進治療である肺移植・再生医学の研究なども、呼吸器診療科チームで取り組んでいます。一人でも多く健康を回復していただきたいと、患者さんを勇気づけながら、私たちは日々努力しています。

## 開会のご挨拶



公益財団法人  
杉浦記念財団  
(株)スギ薬局  
事業本部  
関西営業統括部 部長

**高芝 誠**

スギ薬局グループは杉浦記念財団と共に、地域の皆様に最新の医療や予防の知識を得ることで、病気の早期発見・早期治療・介護予防についてより身近に考えていただきたいと考えます。そんな思いから、健康で安心して生活し続けるためのヒントをお伝えする「健康増進セミナー」を全国で開催し

ています。さて、超高齢化社会となった日本では、2030年には3人に一人が高齢者になるといわれます。いかに最後まで自立して健康的な生活を送れるかが大切です。昨年40周年を迎えたスギ薬局グループはこれから、日本の健康寿命延伸を目的とした『かかりつけドラッグストア』を構築してまいります。薬剤師による処方箋調剤はもちろん、在宅医療にも注力し、予防・未病の観点から管理栄養士による食事や運動など健康に役立つ生活習慣をご提案してまいります。そして、本日のセミナーがより快適で、健康的な生活のためにお役立ていただければ幸いです。

主催：公益財団法人  
**杉浦記念財団**

後援：大阪府 堺市  
社会福祉法人 大阪府社会福祉協議会  
一般社団法人 大阪府看護協会  
大阪府薬剤師会

協賛：**スギ薬局グループ**

## 2部

### 「角膜再生医療

### 「体性幹細胞からiPS細胞へ」

大阪大学大学院医学系研究科  
脳神経感覚器外科（眼科学）教授

**西田 幸二** 先生



## 治らない病気への新しい治療法Ⅱ再生医療

人は、五感のうち視覚が80%以上で、視覚優位に生きています。視覚はカメラと同じで、光の信号が来て網膜で網膜水晶体に集め、視細胞で電気信号に変えて脳の視覚中枢でモノを見ます。このどこが障害されても視力は悪化するのです。失明の疾患は、白内障・緑内障・加齢黄斑変性などです。

この、治らない病気に対しての新しい治療法が、「再生医療」です。幹細胞を原料にして、身体の外で培養・分化させて必要な臓器を得るのです。キーは幹細胞で、体性幹細胞を取り出し、培養します。しかしながら、体性幹細胞は使用用途に限度があるため、それを解消する別の原材料が、受精後の初期胚を培養する「ES細胞」です。これなら、どんな細胞でも作れます。問題は、生命の源である初期胚を取り出さねばならないということとです。そこで、山中伸弥先生が画期的な技術を開発されました。初期胚ではなく、別の方法で分化した細胞から「多能性幹細胞」という最も未分化な細胞に初期化することに成功したのです。これによりノーベル賞を受賞されました。

大阪大学では、角膜の病気にiPS細胞を使う研究に取り組んでいます。最近では、加齢黄斑変性症に対する治療に、iPS細胞から分化させた網膜細胞を使う治療を開発し、試験的投与が始まっています。

## 角膜再生への技術開発とその可能性について

角膜移植は歴史がありますが、ドナーが足りません。また、角膜に血管が入るステイブンス・ジヨンソン症候群は、移植しても拒絶反応で治せない。そこで再生医療による研究が期待されています。そこで、口腔粘膜の幹細胞から角膜代替物を作れば、拒絶反応が起きません。一例ですがほとんど見えない人が、見えるようになりました。

現在は、拒絶反応が起きにくいiPS細胞を選んで、角膜が作れる可能性が生まれています。さらに、目の組織を誘導できるようにもなってきました。すでに技術開発は終わり、移植できる状態になっています。

網膜の病気「加齢黄斑変性」は、網膜の裏側の血管から出血することで、細胞が傷む病気です。それが、2014年にiPS細胞から作った組織を移植した臨床研究が世界で初めて行われました。現在は、他人のiPS細胞を使って網膜移植をする臨床研究が進んでいます。

iPS細胞から臓器そのものを作る研究が、どんどん進んでいます。肝臓移植や1型糖尿病など治らない病気も、再生料技術で遠くない未来に治療できるでしょう。そのためには、倫理的にも議論を深め、研究を進めていかねければならないと思っています。